

3 妖怪とよばれた土木技術者



中尾 聡史
NAKAO Satoshi
京都大学レジリエンス実践ユニット
特任助教



森栗 茂一
MORIKURI Shigekazu
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
教授

「土木工事で働かされた人形の成れの果てが河童である」という民話が全国に広く伝わっている。民話の中に出てくる河童は実在した人間であることが示唆されているが、彼らはなぜ妖怪とされてしまったのだろうか。伝説や伝承の中に隠された土木技術者の姿を知る。

歴史の陰に埋もれてきた土木技術者

日本の津々浦々を生業にわたって歩きまわり、庶民の生活に目を向けてきた民俗学者の宮本常一は『生業の歴史』と題した著書の中で、次のようなエピソードを紹介している。

「土木建築の工事がなされても、讃えられるのはその工事を直接担当した大工や石工ではなく、その工事を計画し出資した人であった。私はかつて熊本県の石橋を調べて歩いたことがあった。熊本県の山間部には目を見晴らせるようなすばらしい石橋がいくつとなくある。それが深い溪谷の上にかかっている。それらの石橋をかけるために苦心して資金を集め、計画した人の名は今もよく伝えられまた人にも知られている。矢部町の通潤橋という見事な石橋をかけた布田保之助の名は県下に知れわたっている。しかしその直接橋の工事をを行った石工たちの名を記憶している人は少ない。」

橋や堤防、ダム、道路などの土木構造物は、私たちの生活を支え、暮らしを豊かなものにしてきた。しかし、土木事業を計画した人物や出資した人物について、取り上げられることがあっても、宮本の言うように、現場で汗を流した土木技



写真1 宮本常一

術者については、あまり注目されて来なかった。

そこで、歴史の陰に埋もれてきた「土木技術者の姿」について、私たちの生活文化である民俗の視点から考えてみたい。

漂泊の民

日本民俗学には、その創始者である柳田国男が考案した「常民」という概念がある。「常民」とは、平地部に定着し、水田稲作に従事する農業民のことを指す。柳田は、日本の人口の大半を占めていたとされる常民に焦点をあてることで、日本人の家制度や祖先に対する観念の分析において大きな成果を収めたのである。

しかし日本には、定着農業民である常民だけが暮らしていたわけではない。定住をせず、各地を放浪し生計を立てていた人々も存在した。家財道具を背負い集団で山間水辺を漂泊し、箕づくりを生業としたサンカ（山窩）や、山中において轆轤をひいて器を作り、良材がなくなると他に移動して生計を立てていた木地師などがこれにあたる。常民の世界の外には、特殊な技術をもった漂泊の民がおり、民俗学では、こうした人々のことを常民と対比して、非常民と呼んでいる。

初期の柳田民俗学においては、『遠野物語』『山の人生』に代表される山人などの非常民の研究が行われていた。そして、非常民の研究である『毛坊主考』では、中世において漂泊の民が、井戸掘りや池作りなどの土木技術を携えていたことを指摘している。このことは、三浦圭一をはじめとする歴史学者によっても、近年、明らかにされつつある。



写真2 通潤橋

こうした漂泊する土木技術者は、定着農業民である常民から、異人視される立場にあった。それを示すのが、河童や鬼などの妖怪にまつわる伝承である。

河童の実在

河童とは、甲羅があつて、頭の皿には渦が巻き、散らし髪で、体は水色か緑色で、胡瓜を好物とする、あの日本の妖怪である。エンコ（淵猿）、ガラツパ、ガタロ（川太郎）、ヒョウスベ（兵主部）、ミズチ（水霊）とも呼ばれる。相撲好きで、馬を水辺の深みに引き込むだけでなく、人を引き込むこともある。

従来の民俗学では、妖怪を神霊の零落したものと捉えており、水辺を住処とする河童は水神の零落したものだとして理解されてきた。しかし、河童は本当に水神なのであろうか。

折口信夫は『河童の話』として、次のような民話を載せている。

「ばんじょうとあまんしやぐめが約束した。入り江を横ぎつて、対岸へ橋を架けるのに、若し一番鶏の鳴くまでに出来たら、島人を皆喰うてもよい、と言ふのである。三千体の藁人形を作つて、此に呪法をかけて、人

として、工事にかゝつた。鶏も鳴かぬ中に、出来あがりさうになつたのを見たばんじょうは、鶏のときをつくる真似を、陰に居てした。あまんしやぐめは、工事を止めて『搔曲放ちよけ』と叫んだ。其跡が『げいまぎ崎』と言はれてゐる。又三千の人形に、千体は海へ、千体は川へ、千体は山へ行け、と云うて放した。此が皆、があたりになつた。」

これは「土木工事で働かされた人形が、工事が終わると放たれて『があたり』すなわち河童になる」という話である。搔曲を放つ（髪を切る）と河童の散らし髪となる。散らしの髪は「童」の形態であり、常民の姿ではない。「土木工事の際に働かされた人形の成れの果てが河童である」という民話は、柳田によっても記録されており、全国各地で採集されている。土木工事を助けた人形、河童とはいったい何のことであろうか。

児童文学作家の松谷みよ子は、岸和田市の久米田池で「行基による堤防工事を土人形が手伝った」という伝承を採集し、今なお、土人形の子孫と呼ばれる人々が、堤防近くに住んでいることを発見している。また、産婦人科医でありながら非農業研究にいち早く取り組んだ若尾五雄は、「ミズチが行基のつくった藁人形から発



写真3 輪中(左から揖斐川、長良川、木曾川)

達し、天竜川の河原に住んでいる」という伝承をとらえ、河童とはまさに「川小僧」と呼ばれる漁業や土木に関わった人々のことではないかと指摘している。歴史実証は難しいが、伝承によれば「河原町」と名のつく町は、土木技術者が住む、または土木技術者に関わる町であるらしい。行基伝承を引く点や、黒鉄(築堤土木技術者)が近世に活躍した天竜川であることを考えると、若尾の推測は外れていない。

つまり河童の伝承は、土木技術者がかつて河原を中心に活躍していたことを物語っているのである。民俗学者の市川秀之が、近世尾張衆の活動を通して指摘した黒鉄も、後に常民から河童と呼ばれたかもしれない。市川はこの尾張黒鉄の源流が、豊臣秀吉によって、荒地開発のために畿内から尾張に集められた陰陽師であることを明らかにしている。陰陽師は卜筮や吉凶を占う呪術者であるが、彼らは地鎮の呪術や萬歳の芸能を持つだけでなく、土木技術をも持ち合わせた漂泊の民であった。

鬼と鉋山

築堤と鉋山は、おなじ黒鉄という名の鶴嘴形の工具

を使う。また坑道の中に落盤を防ぐ井桁を組むが、その技術と堤防の杭打ちにも関連した技術がありそうである。事実、信州佐久高原の五郎兵衛新田の隧道開削に、鉋山師が活躍していたことが言われている。土木技術と鉋山技術の関係について、宮本もこのように述べている。「中国山地とか中部地方の山中には黒鉄師というのがおったんです。黒鉄師というのは鉄山とか銅山で働いておった人です。中部地方の西部、つまり美濃の国、越前の国、そのあたりは金がたくさん出ましたし、銅がでました。それを掘るために黒鉄師が出てきたわけです。その人たちが、やがて銅が出なくなったときに平野へ下ってきて、いろんな土木工事をやるようになります。濃尾平野にたくさん川が流れておる。そうして見事な堤防が残っておる。自分らの村を守るために、輪中と言われる堤防が、多いときには二〇〇を超えるほどあったのですが、それを築いたのはじつは黒鉄師です。それがひとつの景観をつくり出していった。」

こうした特殊な技術を持った非常民は、需要に応じて飛び回り、井戸や隧道を掘ったり、堤防を作ったり、さらには鉋山開発にも関わったのであろう。土木技術者は鉋山師でもあり、鉋山師は土木技術者でもあったのだ。



写真4 河童想像模型

そして、この鉋山師は「鬼」と呼ばれていたことが、若尾によって明らかにされている。鬼とは昔話に登場する、頭には角を生やし、金棒を持ち、鋭い牙を持った妖怪のことである。若尾は、鬼伝説が語られる神社仏閣周辺や鬼の名前がつく地には、鉋山跡やたたら跡があることを、丹念なフィールドワークを通して発見し、鬼とは金、銀、鉄を掘り起こす鉋山技術を持った鉋山師やたたら師であることを説いている。柳田もまた『毛坊主考』の中で、鬼の一部に、山人や漂泊の人々の存在があることを指摘している。若尾の鬼に関する研究は単なる民話構造研究ではなく、歴史学的にも実証される鉋山技術者集団の実相に迫るものである。



写真5 『大江山酒呑童子絵巻』の鬼

連綿と受け継がれてきた伝承

このようにみえてくると、河童や鬼の伝承の一面に、河原や鉋山を拠点として活躍した土木技術者の姿が見え隠れしているのである。もっとも、河童や鬼と伝承された人々が、サンカなのか、黒鉄なのか、はたまた鉋山師なのか、それともその複合なのかは、ケースバイケースで、漠として分からない。しかし、定着農業民である常民の世界の外に、漂泊する土木技術者の姿があったことは間違いなく、河童の民話や鬼の伝説こそ、その生き証人なのである。

書き遺されたものだけが歴史ではない。人々の生活の中で、連綿と受け継がれてきた伝承もまた土木技術者の歴史を語る重要な史料なのである。

<参考文献>

- 1) 宮本常一:『生業の歴史』未来社、1993
- 2) 柳田国男:『毛坊主考』『近代日本思想体系14 柳田国男集』筑摩書房、1975
- 3) 三浦圭一:『中世の土木と職人集団』永原慶二・山口啓二編『講座 日本技術の社会史 土木』日本評論社、1984
- 4) 柳田国男:妖怪談義『定本柳田国男集 第4巻』筑摩書房、1963
- 5) 折口信夫:『河童の話』『折口信夫全集 第三巻』中央公論社、1966
- 6) 柳田国男:『桃太郎の誕生』『定本 柳田国男集第八巻』筑摩書房、1969
- 7) 松谷みよ子:『民話の世界』講談社、2014
- 8) 若尾五雄:『河童の荒魂 河童は渦巻である』堺屋図書、1989
- 9) 森栗茂一:『河原町の歴史と都市民俗学』明石書店、2003
- 10) 市川秀之:『オワリ衆の伝承を追って—近世の池溝築造技術者集団—』近畿民俗、Vol.125, pp.1-15, 1991
- 11) 川元祥一:『被差別部落の生活と文化史』三一書房、1991
- 12) 宮本常一:『民衆と文化』『宮本常一講演選集2 日本人の知恵再考』一般社団法人農山漁村文化協会、2013

<写真提供>

- 写真1 周防大島文化交流センター
 写真2 塚本敏行
 写真3 国土交通省 中部地方整備局 木曾川下流河川事務所
 写真4、5 国立歴史民俗博物館所蔵